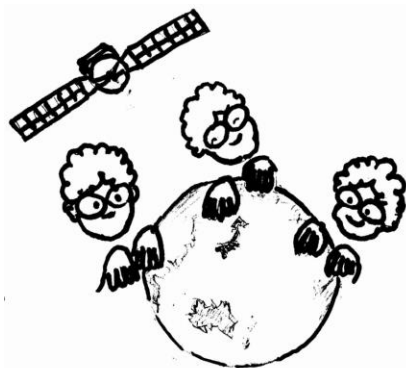


藤田浩子の 少し昔のこと 〈78〉

「私」が世界をさまよう？

映画館で初めて映画を見た婆様が、こんなに暗くてもあんなによく見えるのだから、会場を明るくしたらどんなによく見えるだろうと言ったという笑い話がありますが、当時の人たちはまじめにそう思ったのでしょう。

私が保育者になりたてのころは、ガリ版でクラス便りを書いていました。やすり板の上にロウ紙を置き、鉄筆で書いたところだけロウが削れてインクが通り印刷できるという道具です。印刷するのもインクをつけたローラーを手で押ししました。そのあたりまでは「道具」ですから、私のアタマで



も理解できました。でも今パソコンを使っている書いていますが、実はどうしてこうなるのかさっぱり理解できません。それよりもっと理解できないのは、私がパソコンに向かってしゃべると、それが北海道から沖縄の人から、いえアメリカの人やドイツの人までが、つまり世界中の人が見たり聞いたりしてくださるということです。そのことが私の理解を超えるのです。

昔の人が写真を撮ると魂が抜かれると恐れたように、暗闇で見る映画に驚いたように、今、私はコンピューターに驚いています。「私」がパソコンに向かってしゃべれば、魂が抜かれるどころか「私」が空中分解して空の上でさまようのではないかと恐れています。その「私」を北海道から沖縄の人までが視聴してくださるのです。国内だけではありません、世界中の人が視聴してくださるのです。アメリカやフランスに行く途中で、魂が抜かれた「私」が海の上をさまよっているかもしれません。この春、私はそんな理解を超える経験を何度かしました。あと10年、いえあと5年もしたら、そんなことに驚いて、魂がおかしくなった婆ちゃんがいたんだってさ、という昔話になるのでしょうか。

リレー連載 <211>

わたしの大好きな絵本

すーちゃん (NPO こどもすぺーす 柏 ポレポレ)

1965年初版のこの本。私が出会ったのは20年ほど前ですが、ずっと多くの子どもを元気にしてきたことでしょう。大人の私も、元気になります。

主人公のラチは、世界中で一番弱虫。いつも泣いていました。そんなラチのあこがれは、強そうなライオンの絵。ところがある朝、ラチのベッドのそばにいたのは小さな赤いらいおん！ラチが初め「こんな小さならいおんじゃ役にたたない」と思っていたこの小さならいおんが、やがてラチの心や体を強くしてくれ、ついには、らいおんがいなくて

『ラチとらいおん』

マレーク・ベロニカ 文・絵
とくながやすとも 訳
福音館書店

も、強い子どもになるのです。

元来マイナス思考の私にとって、年齢を重ねている今でも、小さな赤いらいおんは必要です。家族、友達、同僚…大事な大事な私の小さな赤いらいおんさんたち。いつもありがとう。これからもよろしくお願いします。

